

## 元稹と白居易における夢

姜 若 冰

- 一、はじめに
  - (1) 元稹と白居易
  - (2) なぜ夢なのか
- 二、元白の夢に纏わる時間詞
- 三、裴垍を夢む
  - (1)、白居易「夢裴相公」
  - (2)、元稹「感夢」
- 四、元稹「夢井」詩の多義性について
- 五、遊仙詩の場合
  - (1)、白居易「夢仙」
  - (2)、元稹「夢上天」
- 六、結び

キーワード：元稹、白居易、夢描写

### 一、はじめに

#### (1) 元稹と白居易

楊貴妃と玄宗皇帝との悲恋伝説を七言歌行のたおやかな韻律で美しく描いた「長恨歌」のみならず、数々の珠玉の作を残した中国唐代の詩人白居易（字は楽天、772～846）については、こと新たに説明を要しまい。また、その詩集は彼の生前に遣唐使によって日本に招来され、紫式部の『源氏物語』をはじめ、日本文学に多大な影響を及ぼしたことも周知の通りである。

ところが他方、その生涯の親友であるばかりか、詩友でもあった元稹（字は微之、779～831）については、あまり知られていない。

白居易と元稹はともに唐代中期の代表的詩人として名を馳せ、「元白」と併称されて、当時の文壇をリードしていた。そのことは史書の中

でも屢々言及されている。

『旧唐書』卷一六六「白居易傳」には、次のように記されている。

若品調律度，揚推古今，賢不肖皆賞其文，未如元、白之盛也。昔建安才子，始定霸於曹、劉；永明辭宗，先讓功於沈、謝。元和主盟，微之、樂天而已。…贊曰：文章新體，建安、永明。沈、謝既往，元、白挺生。

若し品調律度、古今を揚推せば、賢と不肖と皆な其の文を賞するは、未だ元・白の盛んなるに如かざるなり。昔の建安才子は、始めて覇を曹・劉に定め、永明の辭宗は、先ず功を沈・謝に譲る。元和の主盟は、微之・樂天なるのみ。…贊に曰く：文章 體を新たにするは、建安・永明なり。沈・謝既に往き、元・白挺生す。

唐代中期の元和年間（806～820）の文壇において、（元）微之と（白）樂天が“主盟”、つまりリード役であったと断言されている。白居易の文学を語るには、元稹が欠かせない存在となっていることも、この「白居易傳」で窺い知ることができる。逆もまた然りである。同じく『旧唐書』の卷一六六「元稹傳」の中でも、両者の影響関係が具体的に描かれている。

稹聰警絶人，年少有才名，與太原白居易友善。工為詩，善狀詠風態物色，當時言詩

者稱元、白焉。…俄而白居易亦貶江州司馬，  
稹量移通州司馬。雖通、江懸邈，而二人來  
往贈答，凡所為詩，有自三十、五十韻乃至  
百韻者。江南人士，傳道諷誦，流聞闕下，  
里巷相傳，為之紙貴。

稹 聰警なること人に絶し、年少くして  
才名有り、太原の白居易と友善す。工に詩  
を為<sup>つく</sup>り、善く風態物色を狀詠し、當時詩を  
言う者は元・白と稱す。…俄にして白居易  
亦た江州司馬に貶ぜられ、稹は通州司馬に  
量移せらる。通と江とは懸邈なると雖も、  
二人は來往贈答し、凡そ詩を為る所、三十・  
五十韻より乃ち百韻に至る者有り。江南の  
人士、傳道諷誦し、闕下に流聞し、里巷に  
相い傳へ、之が為に紙は貴し。

元稹と白居易との友情、二人の間での詩のやり取り、その詩作が江南地域で大いに持てはやされていた状況などが詳しく述べられている。

こうした往時の盛名ぶりは相反して、後世では白居易の詩だけが人口に膾炙し続け、詩集も完全な形で現在まで伝わったのに対し、元稹の方は、唐代晩期に評価が下がり<sup>(1)</sup>、北宋時代にすでに人気は凋落し<sup>(2)</sup>、今日我々が目にする詩集も半分近くが散逸した残本にすぎない。

文学研究においても、元稹の詩は往々にして白居易の陰に覆われてその独自性が解明されてこなかったのである。近年に至って、ようやく

元稹を再認識しようとする動きがあらわれた<sup>(3)</sup>が、詩の作風そのものに関して、どういった独自性を持つのか、白居易のそれとどれほど距離があるのか等についての言及未だにない。

元稹を再認識するにあたって、その詩集の伝承がなぜ白居易に遙かに及ばなかったのか、という問題も看過されてはならない。従来のように、詩才の優劣や文集保存に関心があるか否かというレベルで問題を片づけてしまうのではなく、文学の実質においてその原因を探るべきであろう。

小稿は、そういう視座からの試みとして「夢」という語をキーワードに、元白の詩を比較しながら、元稹の詩の特徴を考察してみたい。

## (2) なぜ夢なのか

答えは簡単である。元稹も白居易も詩において「夢」という語を頻繁に使用したからである。

元稹の夢への関心については、花房英樹氏及び高橋美千子氏によってすでに指摘されている。元稹研究に先鞭を付けた花房氏は、著書の中で、『唐詩類苑』“夢”の条目に元稹の作品が数多く収められていることを最も早く指摘した<sup>(4)</sup>。その後、高橋美千子氏は論文「元稹の夢についての考察」<sup>(5)</sup>において、「元稹の詩827首中、夢の語を含むものは75首ある。…明の張之象等編の『唐詩類苑』卷八七人部夢には、69首の夢に関する詩があるが、元稹は12首収められてお

(1)例えば唐末の張為は、『詩人主客圖』を作り、その序に「白居易爲廣大教化主，上入室，楊乘；入室，張祜、羊士諤、元稹…」とあり、白居易より元稹は二つも下のランクに付けられたのである。

(2)北宋末期、劉麟は『元氏長慶集』を上梓させる際に、その序文において、「元微之有盛名於元和・長慶間、…其文雖盛傳一時、厥後浸亦不顯、唯嗜書者時時傳錄、不亦甚可惜乎!…」と言った。

(3)例えば『唐代文学史』（中国社会科学院文学研究所総纂、吳庚舜・董乃斌主編、人民文学出版社、一九九五年）では、「以往一般文学史只把他当作白居易理論的応和者、对其歴史地位估計不足、…元稹和白居易の文学思想は互相影響的、不能把它看做是白倡元隨。…」

といい、文学史上における元稹の地位を、白居易の追隨者と見なしてはいけないという、新たな評価を下している。また、日本において、赤井益久氏は「元稹の文学理念について——元和五年を中心に」（上、下）（『國學院大学漢文学会々報』第三十六、三十七輯、平成二年十月、三年十二月）の中で、元稹が白居易に与えた影響を指摘した。

(4)花房英樹『元稹研究』（彙文堂書店、昭和五十二年三月）245頁。

(5)高橋美千子「元稹の夢についての考察」（『中国文学報』第三十二冊、京都大学文学部中国語学中国文学研究室編集、1980年10月）。

り、白居易の19首に次いで多い」と数字を明確に示した。

また、松岡秀明氏も晩唐詩人における夢という語の使用状況を説明するために、盛唐や中唐の詩人についてその数を調べて一覧表を作ったことがある<sup>(6)</sup>。氏の統計によれば、「夢」のある詩と総詩数との比率は、王維は7/384、李白は68/1004、杜甫は18/1455、韓愈は17/402、元稹は72/828、李賀は21/243、杜牧は62/524、李商隱は72/600、温庭筠は40/335である。

白居易についての数値が出なかった理由は、恐らく白居易の場合は劉禹錫との唱和詩が多く、劉禹錫の字「夢得」が詩題や詩句の中に数多く交じり込んでいることにある。因みに、筆者が白居易の詩を、「夢」の語を含む詩数―「夢得」の語を含む詩数―という、大雑把な計算方法で調べて見た結果、111/2910の比率が出た<sup>(7)</sup>。

上の数字で分かるように、盛唐期から中唐期にかけて、李白と元稹が「夢」に対して興味を持ち、詩中で「夢」に言及した比率が五パーセントを超えて、比較的高く、同時期の他の詩人にはその傾向が見受けられない。以降晩唐期に入ると、李賀、李商隱、杜牧、温庭筠においてともにその使用頻度が上昇し、十パーセントに達している。

しかし、詩題に「夢」の語を含む詩数を見ると、王維は1首、李白は1首、杜甫は3首4首、韓愈は1首、元稹は16題19首、白居易は25題26首、李賀は2首、杜牧は4首、李商隱は3首、温庭筠は0首となっている。晩唐の「夢」は詩句においてのみ頻用されていた実態が浮かび上がる一方、元稹と白居易には夢を主題として扱う詩が極端に多く、やはり両者が夢に対して強い関心を示したことも顕わになった。

元白の二人ともが、「夢」に関する詩を唐代詩人の中で抜きん出るほどに多作したことは、両者の創作における相互影響の大きさを物語っていると同時に、両者の比較に恰好な土台をも提供したと言えよう。小稿は先行研究の成果を踏まえながら、元稹と白居易の詩における夢の扱いかたを比較し、親友であった二人のそれぞれの創作特徴を明らかにしておきたいと思う。

## 二、元白の夢に纏わる時間詞

先ず、言葉の表面上の特徴を見ていくことにする。

白居易の詩をいくつか挙げて見よう。

昨夜夢夢得	昨夜夢得を夢み
初覺思踟躕	初めて覺むれば 思ひは踟躕す

「夢劉二十八因詩問之（劉二十八を夢み因りて詩もて之を問う）」

平生憶念消磨尽	平生の憶念 消磨し尽く
昨夜因何入夢來	昨夜何に因りて 夢に入りて來たるや

「夢旧（旧を夢む）」

平生所厚者	平生 厚くする所の者
昨夜夢見之	昨夜 夢に之に見う

「因夢有悟（夢に因りて悟る有り）」

昨夜夢中彰敬寺	昨夜 夢中 彰敬寺
死生魂魄暫同遊	死生 魂魄 暫く同遊す

「夢亡友劉太白同遊彰敬寺（亡友劉太白と彰敬寺に同遊するを夢む）」

不知憶我因何事	知らず 我を憶うは何事に因るを
---------	-----------------

昨夜三回夢見君	昨夜 三回 夢に君を見る
---------	--------------

「夢微之（微之を夢む）」

(6) 松岡秀明「晩唐詩の夢——李商隱と杜牧の側面」(『中国文学報』第三十冊、京都大学文学部中国語学中国文学研究室編集、1979年4月)。

(7) 調査にあたって、北京大学『全唐詩検索系統』を用いた。

覚後不知馮侍御 覚めし後 知らず 馮侍御  
 の  
 此中昨夜共誰遊 此中に 昨夜 誰と共に遊  
 びしを  
 「夢蘇州水閣寄馮侍郎（蘇州水閣を夢  
 みて馮侍郎に寄す）」

白居易の夢を扱う詩に共通して現れる特徴は、  
 「昨夜」という時間詞がしばしば伴うことであ  
 る<sup>(8)</sup>。

「昨夜」という時間詞の使用によって、「夢」  
 は「過去」という時間帯に設定され、読者は逆  
 に「今朝」或いは「現在」という「目覚めた」  
 時間帯に位置づけられる。つまり「夢」そのも  
 のは過去の出来事として提示される。白居易に  
 は、「夢」を過去の出来事として捉える傾向が  
 あると言えよう。

では、元稹の場合はどうだろうか？ 先ず、白  
 居易との明らかな違いは、元稹の夢を扱う詩に  
 は、時間詞が甚だ少ないことである。白居易の  
 詩で好んで使われる「昨夜」は彼の場合には一  
 例もなく、全体的に見ても、時間詞が使われた  
 のは三例しかない。以下に掲げておく、

今夜商山館中夢 今夜 商山館中の夢  
 分明同在后堂前 同に後堂の前に在るは分明  
 なり  
 「感夢（夢に感ず）」  
 今夕亦何夕 今夕亦た何の夕ぞ  
 夢君相見時 君と相い見う時を夢む  
 「江陵三夢」其一  
 我今因病魂顛倒 我今 病に因りて魂顛倒し  
 唯夢閑人不夢君 唯だ閑人を夢みて 君を夢  
 みず  
 「酬乐天頻夢微之（楽天の頻りに微之  
 を夢むに酬ゆ）」

以上三例から、元稹の詩は時間詞が伴う時も、  
 白居易の「昨夜」とは逆に、「今夜」、「今夕」、  
 或いは「今」が強調されている。元稹は、「夢」  
 を「過去形」ではなく、「現在進行形」と見な  
 しているようである。白居易の「夢」に比べて、  
 元稹の「夢」には時間的距離がないこともあっ  
 て、読者に与える印象も強い。

両者の夢に伴う時間詞には上述の特徴がある  
 のだが、時間詞の伴わない夢を扱う詩において  
 も、元白には次のような異なる傾向が見られる。

「夢」という行為自体は、眠る→夢を見る→  
 目覚める→夢を見たことを自覚する→夢の内容  
 を回想する、といったプロセスを辿る。そして、  
 杜甫のように「晝夢」、つまり「昼間の夢」と明  
 言しない限り、夜を時間背景とする「夢」が一  
 般的である。「遊仙詩」という夢による仙界遊  
 行を描写するジャンルを除けば、詩人が夢に言  
 及する目的は往々にして、夢から目覚めてから  
 の心情を表現するところにあり、覚醒後に夢よっ  
 て引き起こされた感慨を述べることである。そ  
 の感情のあり方も、概ね夢に現れた友人や親族  
 への想いにある。ところが、この点において、  
 元白の二人は異なる特徴を見せている。

白居易の詩は常に目覚めた後、朝や夜明け後  
 の心情と動作を中心に述べるのに対して、元稹  
 の詩では、目覚めた時の心情を写景を以て表し、  
 詩全体は「夜」という背景で夢を中心に描き、  
 夜が明けてからの心の動きや行動などは取り上  
 げない。例を挙げれば、

夜来携手夢同遊 夜来 手を携え 同遊する  
 を夢む  
 晨起盈巾淚莫収 晨に起くれば巾に盈ち 涙  
 収まること莫し  
 白居易「夢微之（微之を夢む）」

(8) 「昨夜」という時間詞についての考察は、『唐詩類  
 苑』に収められている詩に限る。白居易と元稹の用例

を比べてみた結果、白居易には八例が有るのに対して、  
 元稹には一例も無いのである。

覺來疑在側 覺め來たりて 側に在るかと思  
 い  
 求索無所有 求索するも 有る所無し  
 殘燈影閃牆 殘燈 影 牆に閃き  
 斜月光穿牆 斜月 光 牆を穿つ  
 天明西北望 天明くれば 西北のかた望む  
 萬里君知否 萬里 君 知るや否や  
 老去無見期 老い去りて 見う期無し  
 踟躕搔自首 踟躕して 白首を搔く

白居易「夢與李七庚三十三同訪元九  
(李七庚三十三と共に元九を訪ぬるを  
夢む)」

白居易の詩は、夢から覚めた後の心情が必ず  
 描かれ、その「天明」以後の現実における感情  
 のあり方がはっきり読者の前に押し出される。  
 いっぽう、元稹の詩は、

孤吟獨寢意千般 孤吟獨寢 意は千般  
 合眼逢君一夜歎 眼を合わし君に逢う 一夜  
 の歎

元稹「長灘夢李紳(長灘に李紳を夢む)」

亭吏呼人排去馬 亭吏 人を呼び去馬を排せ  
 しむ

忽驚身在古梁州 忽ち驚く 身の古梁州に在  
 るを

元稹「梁州夢(梁州の夢)」

覺來不語到明坐 覺め來たりて語らず 明に  
 到るまで坐す

一夜洞庭湖水聲 一夜 洞庭 湖水の聲  
 元稹「夢成之(成之を夢む)」

というように、元稹の詩は白居易の詩に比べ  
 て、夢からの覚醒以後に言及することが少なく、  
 詩全体は「夢」或いは「夜」という雰囲気浸っ

ているように見える。白居易にとって「夢」の  
 描写は目覚めて以後の感情を表出するためのき  
 っかけであり、目的ではない。しかし元稹の場合  
 は、目覚めてからのことについては興味を示さ  
 ず、「夢」そのものを以て感情表現としている。

といったように、白居易の夢を過去の出来事  
 として語る傾向に対して、元稹は常に時間の経  
 過と共に夢の内容を描き、夢から現実に戻って  
 から夢を回想する態度が無く、夢そのものに浸  
 ているように感じられる。読者から見れば、白  
 居易の詩では、夢は「昨日の夢」であり、時間  
 詞の使用は読者と夢との間に時間的間隔を設定  
 する。それに反して、元稹の詩では、夢そのも  
 のに焦点が当てられ、一種のクローズアップ効  
 果があると言えよう。

### 三、裴垪を夢む

#### (1)、白居易「夢裴相公」

元白の夢を扱う詩における表面上の特徴を見  
 てきたが、次は元稹の夢を扱う長編詩を検討す  
 る。元稹は長編詩、特に排律に創作意欲を燃や  
 していることは周知の通りである。彼の詩には  
 百句を越えるものが11首も有ることがその証明  
 となろう<sup>(9)</sup>。元稹が作る長い詩の中には、夢  
 と関わるものも少なくない。『唐詩類苑』「夢」  
 の条目に収められる四十句以上の詩は、李白の  
 「夢遊天姥吟留別」を含めて七首ある。中でも  
 元稹の詩はほぼ半数を占め、三首が所収されて  
 いる。そして彼の百句を越える詩の中、夢を扱  
 うものも二首入っている。一つは「夢遊春七十  
 韻」であり、もう一つは『唐詩類苑』にも収め  
 られている「感夢」である。『唐詩類苑』「夢」  
 の条目に入っている最も長い詩は、白居易の  
 「和夢遊春詩百韻」であるが、しかしそれも元  
 稹の「夢遊春七十韻」に和したものである。次  
 いで長いのは、元稹の142句もある「感夢」で

(9) 花房英樹『元稹研究』(彙文堂書店、昭和五十二年)  
 第二部「作品総合研究」の三、「言語形式」(二)の

句数統計に拠る。



ある。

では、この「感夢」について検討を加えるに先立って、白居易の「夢裴相公」という詩を見よう。元稹の詩題自注に“夢故兵部裴尚書相公”とあるように、元稹の「感夢」と白居易の「夢裴相公」はともに亡くなった裴垍を夢見た内容である。

裴垍は、元稹と白居易の二人にとって恩人であった。両者が中書判拔萃科の試験を受ける際、裴垍は試験官を務めていた。特に元稹は元和四年（809）に母の喪が明け、官位に復帰する際、当時の宰相である裴垍の抜擢をうけ、監察御史に任命されたのであって、彼の仕官の道において裴垍の存在は大きかったのである。

その裴垍が元和五年（810）に宰相を辞め、次の年病気で亡くなった。白居易の「夢裴相公」は冒頭で「五年生死隔」と記していることから、恐らく元和十一年（816）に作られたもので、白居易が既に江州へ左遷されてからの詩である。そして元稹の「感夢」は『元稹年譜』によれば、元和十二年（817）通州司馬の任にあり、病氣療養のため興元で一年間滞在した後、通州へ戻る途中での作とされている。そうすると、元白二人の詩はほぼ同じ時期に作られ、また二人は共に左遷先という似た状況にいたことになる。

では、まず白居易のほうから見ていこう。「夢裴相公」である。

五年生死隔	五年 生死隔たり
一夕魂夢通	一夕 魂夢通ず
夢中如往日	夢中 往日の如し
同直金鑾宮	同に金鑾宮に直す
髣髴金紫色	髣髴たり 金紫の色
分明冰玉容	分明なり 冰玉の容
勤勤相眷意	勤勤として 相い眷るの意
亦与平生同	亦た平生と同じ
既寤知是夢	既に寤むれば 是れ夢なるを知り

惘然情未終	惘然として 情 未だ終わらず
追想當時事	追想す 當時の事
何殊昨夜中	何ぞ昨夜の中と殊ならんや
自我学心法	我 心法を学びし自り
萬縁成一空	萬縁 一空と成る
今朝為君子	今朝 君子が為に
流涕一沾胸	流涕して 一たび胸を <sup>うるお</sup> 沾す

詩は夢の部分と目覚めの部分と二つに分けることができる。また時間詞の使用も大変多い。冒頭は「五年」と「一夕」で数字の対比を用いて、死んで五年が過ぎて、裴垍が夢に現れたことを作詩に至った契機として紹介する。続いては、「夢中如往日」から夢の中の様子を描くが、それは「亦与平生同」、往年一緒に禁中に当直した時のことという。そして「既寤知是夢」から目覚めの部分に入る。目覚めてから裴垍の生きていた時を振り返ってみると、それは昨夜の夢の中の様子と全く変わることがないと感慨を深くする。最後に仏教の教えを学び始めてから情に動かされることがなかったのだが、今朝は裴垍相公の為に涙を流したという様に、感情表現をもって結ぶ。

白居易のこの詩を後述する元稹の詩と比較するに際して、ポイントとなるのはやはり時間詞であろう。詩の最後に使われる「今朝」という時間詞は全編を貫く立脚点である。全ての叙述はこの時間から出発している。夢を描く部分の「夢中如往日」の「往日」も、「亦与平生同」の「平生」も、目覚め部分で言及した「追想當時事」の「当時」と同じく裴垍が生きていた時期を指している。つまり、夢の中でも目覚めてからの「今」という時点から「過去」への回想という、全体の時間構成が重層化している。「夢」自体は独立した時間を有することなく、現在において生前の裴垍を偲ぶという主旨の下に、全ての時間が統一されている。言い換えれば、白居易の夢は目覚めてから振り返ってみる夢であ

り、夢はあくまでも、その夢によって引き起こされる感慨を表現する為に機能し、夢の描写の中でも、抒情の必要に応じて覚醒後の時間を交錯させ、夢は断片化される。

## (2)、元稹の「感夢」

では、裴垪に抜擢された元稹の詩は、また、その作法と感情の在り方はどのようになっているのだろうか？

元稹の詩は長いため、文末に全編を附して、ここでは詩の口調に沿って、内容を紹介するにとどめる。

十月二日に、私は蓬州の西のほうを通った時、蓬州城から三十里離れた所の芳溪という名前の館舎に泊まった。荒れ果てた館舎に、さらに雨にも濡れて道路もどろどろだった。私もずっと病に罹っているのです、気分も悪く夕飯も食べずに早く床に就いた。

夜中に突然あなたが夢に現れた。別れてもう久しいと嘆き、また私の病気の事について訪ねてくれた。私は痰の病気だと告げ、あなたはそれは大したことではなく、以前あげた橘丸の薬はとても効果があるのに、なぜ未だに治らないのだろうか、ほかに悪いところでもあるのではないかと、親切に聞いてくれた。このように話して、あっという間に半日が経った。話が終わると、一緒に古城の中を歩いた。もう一人いるようだったが、誰であったかは分からない。そこに突然役人がやってきて、あなたでなければ解決できない急用があると言った。しかしあなたは公務を手放して既に長い、再び煩わされたくないと言った。私はそばで聞いて敢えて言った：煩わしい事を取り締まるには手腕のある人物にとっては苦勞とならない、あなたは冬の太陽と同じ、奔走しなくてもよい、あなたは銅鏡と同じ、万物は自ずから照らされるのである、なので、大衆の為に断らないで、と。相公は私

をみて何も言わず、ただ笑うばかり。一緒に城門の前まで歩いて、日も暮れ、相公は私に何も言わず、ただ帰りなさいと命じた。別れた時の言葉は何も覚えておらず、ひたすら涙を流していたことだけを覚えている。

夢から目が覚めて坐り、心の中では悲しさが満ちていた。僮僕も疲れてぐっすり寝ているが、私は思わず涙を流した。涙が止まらず遂に泣き声を上げ、泣き声は僮僕を醒ました。目覚めた僮僕は大いに驚き、どうしたのかと聞いてくれたが、私は答えることができなかった。

翌日は新政県を通った。私の気持ちは重苦しく、人と話すことができないままだった。そこで奇妙なことに、趙明府は私の不機嫌をみて、北から来た僧侶が一人、ここにずっと滞在していると、彼は面相をみることができ、天の真相を知ることでもできると言っている。僧侶と話せば、気晴らしになるのではないかと、教えてくれた。

僧侶が来た。その話も奇妙に昔のことと合致していた。彼は昔、裴相公が若き時靈山寺で読書に励んでいた頃の事を語った。私はそれを聞いて思わず涙を流した。そして誰にも言えない昨夜の夢を僧侶に言った。思うに裴相公は私の心情を察知して僧侶を遣わしてきたのではないかと彼に聞いた。僧侶は裴相公との関係を知ってきた。よく私のことを知っていて、不幸にも先に亡くなってしまったと答えた。僧侶はあなたのように相公から恩恵を受けた人はほかにもいるかと聞いた。私は世の中の正直な人はみなそうであり、中でも私と白生とが似ていると答えた。田舎出身の私を相公が抜擢してくださり、名を揚げてくださったのである。その後も私は相公と付き合いを深め、相公にいつも褒められ、私の頑固なところでさえ認められていた。だが相公の邸宅に足を運ぶことはなく、宰相の門に行き来する人が多く噂も多いからだ。私は自らの志を守り、井戸の水のようにじっとして

いるのだった。しかし先日私は左遷の憂き目に遭い、相公が居てくれれば朝廷への復帰も期待できるが、相公が亡くなったことで私の道も断たれたのだ。同じく白生の道も行き詰まり、讒言によって九江の司馬に左遷された。まことに道理をとえるところがないのだ。今日は僧侶のあなたに苦情を吐き、命ある限り、いつか裴垪相公の恩情に報いたい、この誓いの言葉をお聞きになれと、私は言った。

唐代において夢を扱った詩全体から見ても、元稹のこの詩のように夢を細々と描く詩は見あたらない。詩全体が一編の小説のようである。高橋氏も指摘されているように、元稹のこの詩は登場人物が多く、それぞれの人物は適所で役割を分担して、一つのストーリーを構成している。従来抒情を中心にして夢を扱う方法と違って、元稹の夢は叙事的特徴を備えている。人物の会話をもってシーンを造り、臨場感をもたらし、人物の動作を具体的に描くなど、叙事詩を想起させる。

詩は、65句目の

覚来身体汗 覚め来れば 身体汗す

を切れ目に、“夢”と“目覚め”の前後二部に分けられている。そしてこの二つの部分は相照らし合う構成となっている。夢の中で見たことを覚醒後に会える僧侶に語り得たことによって、読者は徐々に元稹のこの詩の主旨を理解する。夢の中で、裴垪は元稹の病気に気を遣い、元稹のほうも裴垪に助言したりしていた。しかしそれは、白居易の「夢裴相公」のように、一緒に禁中にて当直していた時と変わらないといった、昔日を回想するものではない。

相公不我言 相公 我に言わず  
顧我再三笑 我を顧みて 再三笑う

行行及城戸 行き行きて 城戸に及び  
黯黯余日輝 黯黯たり 余日の輝き  
相公不我言 相公 我に言わず  
命我從此帰 我に命ず 此より帰れと  
不省別時語 省らず 別時の語  
但省涕淋漓 但だ省る 涕の淋漓たるを

元稹の詩に描かれたのは、夢にしか現れることのできない裴垪である。夢らしく、朦朧として、無声映画のようなシーンであった。

夢の中で裴垪相公はなぜ何も言わなかったのか？夢から目覚めた主人公は悶々としているなか、タイミングよくそこに“奇”なる僧侶が登場した。元稹にとって、この僧侶はまさに裴垪の変わり身として自分のところへやってきたような、有り難い存在であった。

無乃裴相君 乃ち裴相君無からんや  
念我胸中氣 我が胸中の氣を念い  
遣師及此言 師をして此の言に及ばしめ  
使我尽前事 我をして前事を尽くさしむるは

そして、ようやく詩人は自ら胸中をうち明ける、

前時予掾荆 前時 予 荆に掾たり  
公在期復起 公在りて 復起を期す  
自從裴公無 裴公の無きより  
吾道甘已矣 吾が道 甘んじて已めり

夢の中から引きずってきたやり切れない気持ち、その根源にあるものがここで全て解き明かされる。裴垪相公が死に、自分の要望に答えてくれることができなくなり、中央朝廷へ復帰する希望も断たれた。つまり裴垪を夢見たことは何を意味するかというと、覚醒後に僧侶に語ったように、自分の現実における苦境を明らかにし、己の苦悶を吐き出すところにあったのだ。



元稹は夢と覚醒の二重構造を設けることによって、現実における自分の対面せざるを得ない問題をリアルに引き立てて見せたのである。

このような夢と現実の二重構造は、彼のほかの詩にもよく用いられている。例えば亡き妻章叢を夢見た「江陵三夢」その一では、

依稀旧粧服　依稀たり　<sup>ふる</sup>旧き粧服  
 唵淡昔容儀　唵淡たり　昔の容儀

と、夢に現れた妻の様子を簡単に描いて、引き続くセリフは、

囑云唯此女　囑して云うは　唯だ此の女<sup>むすめ</sup>あるのみ  
 尚念嬌且駿　尚お念う　嬌<sup>かい</sup>にして且つ駿なるを  
 君在或有託　君在らば　或いは託する有るも  
 出門當付誰　門を出づれば　當に誰にか付すべき

覚醒後は対照的に、夢中の亡妻の心配に対して現実には、

悲君所嬌女　君を悲しむ　嬌<sup>あい</sup>する所<sup>むすめ</sup>の女  
 棄置不我随　棄置して　我に随<sup>しづ</sup>わず

...

今宵淚零落　今宵　淚　零落す  
 半為生別滋　半ば生別の為<sup>しづ</sup>に滋し

まさにその望ましくない方向にあると述べる。更に、今夜の涙は半分、現実における娘との離別のために流しているとはっきり言い切っている<sup>(10)</sup>。

こうした元稹の夢の描きかたは、白居易の書き方とは大きく異なっていることが明らかである。白居易の「夢裴相公」が夢の時間と覚醒後の抒情の時間とを交錯させながら詩を構成しているのと違って、元稹はあくまでも時間の流れに沿って詩を展開させていく。冒頭は、

十月初二日　十月初二日  
 我行蓬州西　我　蓬州の西に行く  
 三十里有館　三十里にして　館有り  
 有館名芳溪　館有り　名は芳溪  
 荒郵屋舍壊　荒郵　屋舍壊れ  
 新雨田地泥　新雨　田地泥<sup>ぬか</sup>る  
 我病百日余　我病むこと　百日余  
 肌体顧若割　肌体　顧<sup>おも</sup>えば　割<sup>き</sup>かるが若<sup>ごと</sup>し  
 氣填暮不食　氣填ぎ　暮に食さず  
 早早掩寶圭　早早　寶圭を掩う

時間を設定されると同時に、主人公である「我」が登場する。まるで第三者がそばで見ていくかのように、詩人は自分自身を客体として描き出しており、夢に現れる裴相公しか描かれない白居易の詩とは異なる。そして覚醒して後に夢は解釈されていくが、元稹は終始、直接的な抒情を控え、自分を客体として描き、その客観的な効果によって抒情を成功させていくのである。

白居易の夢の記述は断片的で、夢を自分の感情表出のきっかけとしか見なさず、従来の伝統的な夢の扱い方に従っている。他方元稹は、叙事的な手法で巧みに夢を描き、感情の表出に至る。白居易に比べて、元稹の夢の扱い方の方が能動的で、新鮮である。

(10) 山本和義氏は、「元稹の艶詩及び悼亡詩について」(『中国文学報』第九冊、京都大学文学部中国語学中国文学研究室編集、1958年10月)の中で、この詩について、「この一首にうたい込まれた夢は、きわめて効果

的である。フィクションを巧みにすることによって、詩は、生きている。」「この詩にみられる夢は、粹があり、その粹の中で、現実の世界を、再構成している。」と指摘したことがある。

#### 四、元稹「夢井」詩の多義性について

今までの考察をまとめて言えば、白居易においては夢は抒情のきっかけとして働くに過ぎず、反対に元稹の夢は、「夢」自体をライトアップし、それによって現実における苦境を一層鮮明に映し出そうとする特徴がある。その特徴をもう一首、元稹の「悼亡詩」に収められた「夢井」を通して確認してみよう。

夢上高原 夢に<sup>のぼ</sup>上る 高高たる原  
 原上有深井 原上に深井有り  
 登高意枯渴 高きに登りて 枯渴を<sup>おも</sup>意い  
 願見深泉冷 深泉の冷たきを見んことを願う  
 徘徊繞井顧 徘徊して 井を<sup>めぐ</sup>繞りて顧み  
 自照泉中影 自ら照す 泉中の影  
 沈浮落井瓶 沈浮す 井に落つる瓶  
 井上無懸綆 井上 懸綆<sup>けんこう</sup>無し  
 念此瓶欲沈 此の瓶の沈まんと欲するを<sup>おも</sup>念いて  
 荒忙為求請 荒忙として 求請を為す  
 遍入原上村 遍く入る 原上の村  
 村空犬仍猛 村空しくして 犬<sup>な</sup>仍<sup>たけ</sup>お猛し  
 還來繞井哭 還<sup>かえ</sup>來たりて 井を<sup>めぐ</sup>繞りて哭す  
 哭聲通復哽 哭聲 通じて復た哽<sup>むせ</sup>ぶ  
 哽噓夢忽驚 哽<sup>こうえつ</sup>噓 夢 忽ち驚め  
 覺來房舍靜 覺め來れば 房舍靜かなり  
 燈焰碧朧朧 燈焰 碧くして 朧朧たり  
 淚光凝罔罔 淚光 凝りて 罔罔<sup>けいけい</sup>たり  
 鐘聲夜方半 鐘聲 夜 方に半ばならんとし  
 坐臥心難整 坐臥するも心は整い難し  
 忽憶威陽原 <sup>たちま</sup>忽ち憶う 威陽の原  
 荒田萬余頃 荒田 萬余頃  
 土厚墳亦深 土厚くして 墳亦<sup>こうま</sup>た深く  
 埋魂在深塹 魂を埋むるは 深塹に在り

塹深安可越 塹深くして 安ぞ越ゆ可けんや  
 魂通有時遲 魂通じ 時に<sup>ほし</sup>遅いままにすること有り  
 今宵泉下人 今宵 泉下の人  
 化作瓶相誓 化して瓶と<sup>な</sup>作りて相い誓わしむ  
 感此涕洟瀾 此に感じて 涕<sup>なみだ</sup> 洟<sup>がんらん</sup>瀾たり  
 洟瀾涕霑頷 <sup>がらん</sup>洟瀾として 涕<sup>なみだ</sup> 頷<sup>えり</sup>を<sup>うるお</sup>霑す  
 所傷覺夢間 傷む所は 覺夢の間  
 便覺死生境 便ち覺ゆ 死生の境  
 豈無同穴期 豈に同穴の期無からんや  
 生期諒綿永 生期 <sup>まこと</sup>諒に綿永たり  
 又恐前後魂 又た恐る 前後の魂  
 安能兩知省 安ぞ能く<sup>よ</sup>兩<sup>ふた</sup>ながら知省せんや  
 尋環意無極 尋環 意 極まる無し  
 坐見天將昞 坐して見る 天の<sup>まさ</sup>將<sup>あけ</sup>に昞んとするを  
 吟此夢井詩 此の井を夢むるの詩を吟ずれば  
 春朝好光景 春朝 好光景

この詩は元和五年の春、妻韋叢が亡くなった半年後に書かれた悼亡詩である<sup>(11)</sup>。

夢で高原に登り、井戸の中につるべ縄のとれた瓶を見た詩人は、沈もうとしている瓶を救おうとしたが、助けられず、ただ泣いてばかりであった。そこで、目が覚め、詩人は自ら夢を解釈した：つるべ縄のない瓶は亡き妻の魂であり、お墓のある咸陽原から自分のもとへやってきたという、最後に死生の境に分かれた死別の悲しみを詠う。

この詩もまた、前面で検討した「感夢」と同じように、夢の描写と夢の解釈から成る。そして、感情表出もやはり「感夢」と同じく、夢の内容を客観的に語る手法を取っている。

実はこの「夢井」詩については、いくつかの相反する意見が提出されている。分岐点は、夢の記述の真実性にある。従来の意見としては、

(11) 卞孝萱『元稹年譜』（齊魯書社、一九八〇年）145頁

に拠る。

この詩は「傷悼詩」に収められているので、亡妻韋叢の死を悼む悼亡詩と見なし、夢の内容も虚構としていた<sup>(12)</sup>。しかし、最近では、この夢の内容を真なる夢の記録として捉え、敢えて元稹自身の解釈を抜きにして、大量の傍証資料を援用し、更にはフロイドの夢解釈をも参考にして、元稹が若き時の恋人「鶯鶯」との離別を悲しんだ艶詩として読みとろうとする見解も現れている<sup>(13)</sup>。

夢の内容が虚構か、それとも真実か、それを決めるのは我々の手には余る。たとえ実際の夢にしても、現代心理学の研究成果によれば、

夢はその個人の過去(前日の経験を含めて)と、その個人のもっている感情傾向によって、とくに支配されやすい。日常生活のコトバで、これを表現し、報告するときには、変化してしまう<sup>(14)</sup>。

語られた夢は、語られたことで既に変わっている、という。夢を鮮明に語ろうとしても、そこには必ず語り手の主観意識が介入する。

しかし、元稹のこの詩について、多義性が生じたこと自体が、注目すべき問題ではなかろうか。この夢の解釈に多義性が生じたのは、対象の特定される夢ではない、そのことが先ず原因として考えられる。その一方で描き方は具体的で真に迫っている。夢を抒情のきっかけとして描く白居易の夢より、元稹の夢は膨らみを持ち、夢自体が独立して、独自の世界を展開している。特に、夢中と夢後の主人公に関する心理描写は、感情を直接表白する詩的表現方法とは違って、小説的、散文的である。元稹は夢の内容を客観的に記述することによって、感情を表現するという独自の方法を取っていたのである。この方

法は彼の夢を扱う詩全体に一貫して見られ、殊に夢の対象が特定しない、この「夢井」詩においては、多義性が生じるに至ったのであろう。

## 五、遊仙詩の場合

最後に、実際の夢ではなく、夢を仙界遊行の器として用いる遊仙詩についても触れておこう。

夢と遊仙詩との結合について稿を改めて論じる必要があるが、筆者の調査では、詩において、夢の中での仙界遊行を詳しく描き出したのは、初唐の王勃「忽夢遊仙」からである。以来「夢仙詩」が数多く作られ、『唐詩類苑』所収李白の「夢遊天姥吟留別」もそのジャンルに属す。

しかし白居易と元稹は、一般の「夢遊仙」詩と全く違う主旨でこのジャンルを手がけたのである。但し、彼らは、各々独自の方向を向かったのである。

### (1)、白居易の「夢仙」

白居易の「夢仙」は詩集の中で「諷諭詩」に分類され、彼はこの詩の中で神仙信仰を批判する立場を明らかにした。詩は最初に、

人有夢仙者	人 仙を夢むる者有り
夢身昇上清	身の上清に昇るを夢む
坐乗一白鶴	坐して乗る 一白鶴
前引双紅旌	前に引く 双紅旌

仙界への旅立ちから書き始め、仙界を鮮やかに描いてから、夢仙者の信仰深さを強調していく、

帝言汝仙才	帝言う 汝仙才あり
努力勿自輕	努力して自ら軽んずること勿か

(12) 山本和義氏並びに高橋氏前掲論文を参照。

(13) 坂野学「元稹【夢井】詩試論」を参照。函館大学論究第20輯、一九八八年。

(14) 宮城音弥『夢』第二版、157頁、岩波新書一九九二年第29刷。

れと

(再拜受斯言)

既寤喜且驚 既に寤むれば 喜び且つ驚く  
 秘之不敢泄 之を秘めて敢えて泄さず  
 (誓志居巖窟)

次は、長年の修練生活のあげくに、

一朝同物化 一朝 物と<sup>とも</sup>に化し  
 身與糞壤併 身は糞<sup>ふんじょう</sup> 壤と併<sup>なら</sup>ぶ  
 神仙信有之 神仙 信に之有るも  
 俗力非可嘗 俗力は嘗む可きに非ず  
 悲哉夢仙人 悲しきかな 仙を夢むる人  
 一夢誤一生 一夢に一生を誤る

夢の破滅を見せ、最後は説教で詩を終える。

白居易のこの詩は、神仙信仰に没頭する愚かさ、その最終的失敗をもって説明しようとしている。“神仙信有之、俗力非可嘗”、神仙世界は確かに有る、ただそれは、俗物の我々が成就できることではない。神仙世界を認めた上で、一般人の努力が徒労に終わることを説く。では、相似する題材で元稹はどのように書いたのか。

## (2)、元稹の「夢上天」

夢上高高天 夢に<sup>のぼ</sup>上る 高高たる天  
 高高蒼蒼高不極 高高蒼蒼として 高きこと  
 極まらず  
 下視五嶽塊累累 下に視れば 五嶽 塊 累  
 累たり  
 仰天依旧蒼蒼色 天を仰げば 依旧 蒼蒼た  
 る色  
 踏雲聳身身更上 雲を踏み身<sup>そ</sup>を聳<sup>だ</sup>てて 身  
 は更に上らんとし  
 攀天上天攀未得 天に攀<sup>よ</sup>じりて天に上らんと  
 するも 攀<sup>よ</sup>じること未だ得  
 ず  
 西瞻若木兔輪低 西のかた<sup>み</sup>瞻れば 若木 兔

輪低く

東望蟠桃海波黑 東のかた望めば 蟠桃 海  
 波黒し  
 日月之光不到此 日月の光 此に到らず  
 非暗非明煙塞塞 暗きに非ず明るきに非ずし  
 て 煙 塞塞たり  
 天悠地遠身跨風 天悠かにして地遠く 身は  
 風を<sup>また</sup>跨ぎ  
 下無階梯上無力 下らんとするも階梯無く  
 上らんとするも力無し  
 來時畏有他人上 來たる時 他人の上ること  
 有るを畏れ  
 截断龍胡斬鵬翼 龍胡を截断して 鵬翼を斬  
 る  
 茫茫漫漫方自悲 茫茫漫漫として <sup>まさ</sup>方に自ら  
 悲しみ  
 哭向青雲椎素臆 哭きて青雲に向かい 素臆  
 を<sup>う</sup>椎つ  
 哭聲厭咽旁人惡 哭聲厭咽 旁人<sup>にく</sup>惡み  
 喚起驚悲淚飄露 喚び起せば 驚き悲しみ  
 て 淚 飄露たり  
 千慚萬謝喚厭人 千慚萬謝して 厭<sup>いと</sup>う人を喚  
 ぶ  
 向使無君終不悟 <sup>さき</sup>向に<sup>も</sup>使し君無くんば <sup>つい</sup>終に  
 悟めざらんと

この詩で元稹は前述の作品のような夢と現実の二重構造を使わず、夢で天に上る人の心理に焦点を絞っている。

詩は、「感夢」と同じ年、元和十二年に作られ、同時に綴られた作品は十九首で、元稹はその序「樂府古題序」でこういう、

昨梁州見進士劉猛、李餘、各賦古樂府詩  
 數十首、其中一二十章、咸有新意。余因選  
 而和之。其有雖用古題、全無古義者、若出  
 門行不言離別、將進酒特書列女之類是也。  
 其或頗同古義、全創新詞者、則田家止述軍

輸、捉捕詞先螻蟻之類是也。劉李二子方將極意於斯文，因爲粗明古今歌詩同異之音焉。

昨 梁州にて進士劉猛・李餘の、各古樂府詩數十首を賦するを見るに、其の中の二十章、咸新意有り、余因りて選びて之に和す。其れ古題を用うると雖も、全く古義無き者有り、出門行は離別を言わず、將進酒は特だ列女の類を書くが若きこと是れなり。其れ頗る古義に同じく、全て新詞を創る者或り、則ち田家は止だ軍輸を述べ、捉捕詞は螻蟻の類を先にすること是れなり。劉・李二子は方將に意を斯文に極めんとし、因りて爲に粗ば古今の歌詩・同異の音を明らかにするなり。

“昨日、梁州で進士劉猛、李余の作った古樂府詩数十首を見た。其の中の十数章は皆新意有る。僕は選んで此に和した。その中に古題を用いると雖も、全く古義の無いもの有る。…その中に或いは古義と同じくして、詞を新たに創るもの有る。…”元稹の新意を追求する意欲はこの序文からも窺えよう。

この詩は、ほぼ全編にわたって、夢だけに筆墨を費やしている。天に登ろうとして天に届かないという、苦しい心情、落ち着かない状況を、夢見る者の感覚を借りて読者に訴える。夢で美しい仙界を遊行するのではなく、また、白居易のような普遍的な意味を持つ説教でもない。彼は天を夢みる者の苦しい心理状況だけを繊細に描き、神仙信仰への反対を表したのである。天界を夢見る者の目に映ったのは、暗くて身を寄せる場所もない「地獄」のようなところである。白居易の詩と違って、元詩においては作者が登場せず、読者は夢天者と同じ目線で、その夢天から目覚めまでの心理過程を追う。最後の悟りも、誰かの説教によるものではなく、夢天者自

身が悪夢によって覚醒できたという、極めて客観性の強い設定となっている。その発想はユニークで面白い。

遊仙詩のジャンルにおいて、元稹も白居易も夢を神仙信仰批判の道具として用いたが、その夢の扱い方を比べて、やはり元稹は、夢描写に一層力を注いだように見える。白居易と違って、元稹は作者からの発言を抑え、夢に独自の力量を発揮させようとしていたのである。

## 六、結び

元稹と白居易の同じ題材の作品を取り上げて、考察を行った。白居易のストーリーを持たない夢は、伝統に従い、夢を感情表出のきっかけとししか見なさなかったのに対し、元稹は時間の経過とともに夢を描き、夢に登場する自分自身を客体と見なし、夢に即した描写によって感情を表現したのである。また、場合によっては、夢と現実の二重構造をもって抒情の厚みを増したりする。

元稹の夢は白居易のそれと比べて、異色である。元稹の夢描写が小説的な書き方に影響されたことを、前掲高橋論文も指摘があるが、もっと早い言及として、陳寅恪氏の言葉を値しよう。

微之天才也、文筆極詳繁切至之能事。既能於非正式男女間關係如與鶯鶯之因縁、詳尽言之於會真詩伝、則亦可推之於正式男女間關係如韋氏者、抒其情、写其事、纏綿哀感、遂成古今悼亡詩一体之絶唱。矣由其特具写小説之繁詳天才所致。殊非偶然也<sup>(15)</sup>。

微之は天才なり、文筆は詳繁切至の能事を極む。既に正式に非ざる男女間關係を能くし、鶯鶯との因縁の如きは、詳盡して之を會真詩伝に言い、則ち亦た之を正式の男

(15) 陳寅恪『元白詩箋証稿』（上海古籍出版社、一九七

八年）第四章“艶詩及悼亡詩”99頁。



女間關係に推すべく、韋氏のごとき者は、其の情を抒<sup>の</sup>べ、其の事を写すこと、纏綿たる哀感ありて、遂に古今悼亡詩一体の絶唱を成す。実に其れ特に小説を具写するの繁詳なるに由り、天才の致す所にして、殊に偶然に非ざるなり。

散文や小説的な仕組みと描き方を詩に持ち込んだこと自体が、元稹の詩が他の詩と一線を描くところであろう。しかし、彼の詩は、ストーリーを持ってはいても、白居易「長恨歌」のような、すでに人口に膾炙した物語ではなく、彼自身の体験に基づく内容が多かったため、言わば「私小説」的な一面を有し、広がりを持たない。特に夢を扱う長編詩は、暗くて緊張した雰囲気<sup>霧</sup>に覆われることが多く、主人公ないし自分自身の、重苦しい心情を強調することが殆どである。不遇の感慨は、元稹の詩全体に見渡すことのできる重要な主題であるが、それはこれら夢の詩に見られるように、往々にして個人の鬱憤に終わるのであり、詩としての命とも言える普遍性、凝縮性までに昇華しきれていない。読者の心に深く長く残ることができなかった。後世への伝承が難しかったであろう。しかしその試み自体は斬新なものとして、元稹の再認識に当たっては特筆すべきだろう。

附：「感夢」（夢故兵部裴尚書相公） 元稹  
十月初二日，我行蓬州西。  
三十里有館，有館名芳溪。  
荒郵屋舍壞，新雨田地泥。  
我病百日餘，肌體顧若刳。  
氣填暮不食，早早掩寶圭。  
陰寒筋骨病，夜久燈火低。  
忽然寢成夢，宛見顏如珪。  
似歎久離別，嗟復懷悽悽。  
問我何病痛，又歎何棲棲。  
答云痰滯久，與世復相睽。

重云痰小疾，良藥固易擠。  
前時奉橘丸，攻疾有神功。  
何不善和療，豈獨頭有風。

（予頃患痰，頭風踰月不差。  
裴公教服橘皮朴硝丸，數月而愈。  
今夢中復徵前說，故盡記往復之詞。）

殷勤平生事，款曲無不終。  
悲歡兩相極，以是半日中。  
言罷相與行，行行古成裏。  
同行復一人，不識誰氏子。  
逡巡急吏來，呼喚願且止。  
馳至相君前，再拜復再起。  
啟云吏有奉，奉命傳所旨。  
事有大驚忙，非君不能理。  
答云久就閒，不願見勞使。  
多謝致勤勤，未敢相唯唯。  
我因前獻言，此事愚可料。  
亂熱由靜消，理繁在知要。  
君如冬月陽，奔走不必召。  
君如銅鏡明，萬物自可照。  
願君許蒼生，勿復高體調。  
相君不我言，顧我再三笑。  
行行及城戶，黯黯餘日暉。  
相君不我言，命我從此歸。  
不省別時語，但省涕淋漓。  
覺來身體汗，坐臥心骨悲。  
閃閃燈背壁，膠膠雞去埽。  
倦童顛倒寢，我淚縱橫垂。  
淚垂啼不止，不止啼且聲。  
啼聲覺僮僕，僮僕撩亂驚。  
問我何所苦，問我何所思。  
我亦不能語，慘慘即路岐。  
前經新政縣，今夕復明辰。  
實實滿心氣，不得說向人。  
奇哉趙明府，怪我眉不伸。  
云有北來僧，住此月與旬。  
自言辨貴骨，謂若識天真。  
談遊費閤景，何不與逡巡。

僧來為予語，語及昔所知。  
自言有奇中，裴相未相時。  
讀書靈山寺，住處接園籬。  
指言他日貴，晷刻似不移。  
我聞僧此語，不覺淚歔歔。  
因言前夕夢，無人一相謂。  
無乃裴相君，念我胸中氣。  
遣師及此言，使我盡前事。  
僧云彼何親，言下涕不已。  
我云知我深，不幸先我死。  
僧云裴相君，如君恩有幾。  
我云滔滔眾，好直者皆是。  
唯我與白生，感遇同所以。

官學不同時，生小異鄉里。  
拔我塵土中，使我名字美。  
美名何足多，深分從此始。  
吹噓莫我先，頑陋不我鄙。  
往往裴相門，終年不曾履。  
相門多眾流，多譽亦多毀。  
如聞風過塵，不動井中水。  
前時予掾荆，公在期復起。  
自從裴公無，吾道甘已矣。  
白生道亦孤，讒謗銷骨髓。  
司馬九江城，無人一言理。  
為師陳苦言，揮涕滿十指。  
未死終報恩，師聽此男子。

